

石川県石川郡手取川流域村落にみられた住民の自然認識（II）
—吉野谷村地区高齢者間の環境認識に関する考察、
アニマル・ロアへの接近—

広瀬 鎮 名古屋学院大学

COGNITION FOR NATURE, APPEARED AMONG RESIDENTS AT
ALONGSIDE OF RIVERS IN ISHIKAWA PREFECTURE (2)
—COGNITION FOR ENVIRONMENTS AMONG AGED PEOPLE
OF SHIMOYOSHINO, YOSHINODANI MURA—

Shizumu HIROSE, *Nagoyagakuin University*

吉野谷村地区高齢者間の環境認識に関する考察—アニマル・ロアへの接近—

石川県石川郡吉野谷村，下吉野地区の変化を地域社会に暮らす高齢者の多くが，何をもって大きな変化としてとらえているか，この点をめぐっての住民間の聞き取りをおこなってみたが，その第一にあげられたのは，周辺の道路の拡大であり，第二は，小川の消失であり，第三に，生活の安全化，これは，とくに子供たちの日常生活から多くの危険がなくなった点が，指摘されたのであるが，ここで注意しなくてはならないのは，急速に拡大化のはかられた道路については，高齢者間の個々の間で，その評価が著しくことなる点である。車社会の発展が，生活と直・間接に係わる者と，そうでない者との間では，当然ながら認識の実態が異なってくるのである。

現在，引続き調査中の高齢者間の自然観・物質観の実態については項を改めて報告の予定であるが，本論は地域内地名の記憶と，若干のアニマル・ロアに係わる伝承の収録情報を取り上げ，考察を試みたいと考える。すでに吉野谷村での伝説については，新田真子氏が「吉野谷村物語（吉野谷村発行1984）」において“こうもん橋の由来”他13の伝説を記載しているのであるが，筆者も聞くことのできた下吉野中野なつさんからの伝承の聞き取りは1989年2月時において，今後聞き取りは無理であるとの通報を受けており，残念なことと考えている。

地域における地名研究会活動

白山麓山村の変化の動態も，全国の山村にも普遍的にみられてきたものと考えられる。

吉野谷村においても，製炭・焼畑・木地・狩猟・養蚕などの“山の文化”の多種現象の衰失がみられるのであり，これらは，村々の都市化，工業化，産業の高度化と係わった社会変化を前提としているのである。このような社会変化の中で，地域住民は，伝統的な社会習俗を継承しながらも，日々の生活の近代化に迫られていたのであるが，近年の高齢化時代の到来と共に地方自治体の行政施策にみられる高齢者福祉とむすびつく，高齢者学級講座の急速な発展に注目せねばならない。

すでに、1972年10月14・15日、下吉野・中宮地区調査の折りの聞き取り、1974年1月の調査等をもとに、白山麓下のニホンザルをめぐる狩猟伝承や、住民の動物観を考察したのであるが、(広瀬・水野、1975) 下吉野地区においては、専門の狩猟者も少なく、住民もクマ・サルなどの動物との接触の機会も少なく、動物情報に接することはほとんどなかったのである。その中において、下吉野における「猿鏡」伝承はニホンザルにふれたアニマル・ロアの一例となっていた(広瀬、1981)。

文久3年(1863)下吉野、上吉野村等白山麓村落の自然・生物にかかわる状態を記した横山政和の「小松近郊巡見道之記」は、釜清村の“猿鏡”について述べてあるが、山本重孝氏(下吉野)によれば、戦前まで吉野十景の中心であった黄門橋に老猿が住みついて、時折出没したという。

“こうもん橋”にかかわる伝説の根底にあるのは、手取川をはさんだ吉野地区と釜清水地区の人々のいわば執念のような思いであったことは容易に想像できる。今日、この橋のもつ交通の要所としての価値はきわめて高い。今日、下吉野地区は、急速な観光化の中において地域社会の構造変化を迫られている。吉野・工芸の里の開発と同時に、産業情報センターが設置され、KK吉野開発の手によって、下吉野を中心とした広範囲に及ぶ地域活性化が図られている。

したがって当然のことながら、従来から継承された地域の生活伝統・習俗等も急激な文化接触による文化変化をもたらされてしまったのであるが、味知郷趾、願慶寺、御仏供杉、雲龍山、黄門橋等幾多の文化財、文化地帯も新たな環境開発とかかわらざるをえない。雲龍山遊歩道、工芸の里計画等による「人寄せ」は、必ず多くの文化変容をもたらすものと考えられているのであるが、そのなかにおいて、下吉野地区、亀寿会の働きかけで、「昭和62年度、地名の調査確認と地名の由緒」が解明されつつあることは注目されねばならない。

吉野谷村「工芸の里構想」は、下吉野御仏供杉の隣に位置し、九谷焼陶芸家、松本佐一氏が、富山県利賀村の旧家を移築、新作製作が進められているが、村としての各種文化広場、物産館構想の根底にあるのは観光地化であるが、吉野谷村に新たな息吹を吹き込むものとして期待度の高い事業なのである。観光立村に向け村は動き出した。過疎化からの脱皮をめざした村興が、実を結ぼうとしているとして明日の吉野谷村のビジョンが打ち出されている下吉野地区で、すでに筆者は1972年来、同地区の近代化をめぐる調査を山本重孝氏他と進めてきたので、以下に1988年3月における聞き取りをもとに、地名記憶と動物観の一部の知見を以下に述べてみよう。

亀寿会の地域伝承調査活動

1988年3月4・5日、24・25日、下吉野地区における高齢者間の自然認識調査において、山本重孝



図1 下吉野地区に設置された産業情報センター
(下吉野の環境文化は大きく変ろうとしている)



図2 工芸の里
富山県利賀村旧家(移築)

氏の進めていた亀寿会「地名聞き取り」にも加わることとなった。筆者は、アニマル・ロア継承の現状について聞き取りを行ったのであるが、キツネ、タヌキ、カワウソ、ムジナなど昔から、下吉野地区の人々との生活とかかわった生きものについて重点的に調査することができた。

昭和63年1月31日現在の吉野谷村における男女別65才以上の人口について、住民基本台帳によると、吉野谷村全体で男132名女子186名計318名であり、全人口比で20.7%を占めている。このことは、下吉野地区のみの65才以上の高齢者人口をみるとほぼ同様で、下吉野地区も地区人口の20.1%が65才以上の高齢者在住である。しかも女子が男子より多い下吉野地区では65才以上の男子15名、女子29名である。

亀寿会による下吉野地区の地名由緒や伝承の収録は今後、上吉野地区の収録後にまとめられ刊行の計画がたてられているのであるが、本論では中野なつ（89才）他14名の高齢者から聴取しえたアニマル・ロアを中心として考察を行う。

亀寿会は昭和61年度に、老人と子供の交流事業の一環として、地名学習に着手したのであるが、あくまでも地域のものによる実地調査であり、各地の地名確認の作業であったし、地名由緒の新しい発掘の作業でもあった。筆者の参加する前からすでに開かれていた亀寿会の学習会は、昭和62年度の金曜毎の「話し合い」は、地元の生活改善センターでの集会活動を通じて多くの伝承収録と記録化へと発展していったのである。亀寿会を通じて、判明してきた吉野十景にかかわる地名においても、黄門橋など古くからよく知られているこの地名が黄門橋、高門橋、鴻門橋、蝠蝠橋、こんもり橋など5通りの記述がなされること、しかも鴻が飛び交う姿からのヒント、あるいは兩岸の老松の姿がこうもりの飛ぶ姿を思わせる等、動物の生態にかかわったアニマル・ロアとのむすびつきが示されていたのである。当然ながら地名は地域の自然、野生鳥獣の生息と無関係であったとはいえないのである。

下吉野地区のアニマル・ロア

現在のところ、亀寿会メンバーにより、下吉野地域114地名由緒が収録されているが、地名にまつわる由緒伝説は、特に昭和50年代の同地区の基盤整備によって急速に消滅したものと考えられている。

したがって、下吉野地区での歴史的遺跡への考古学、歴史学、民俗学からの総合的な研究調査が、今日特に強く望まれている。

また、山本重孝氏によれば、吉野谷村と河内村の村境を巡り、「村境」に関する研究調査が、地域民の生活史を解明するうえで重視されねばならないとされ、この面での調査活動も始められているのである。今後さらにアニマル・ロア情報が収集されるものと考えているが、これまでに亀寿会において語られた昔話では、キツネに化かされた話、送り犬の話、ミズシ（河童）、サル、天狗、ウマ、タヌキ、カモシカ、ツチノコ、大蛇などの生き物にかかわった民俗伝承が収録された。圧倒的にキツネ、イヌ、蛇にかかわるものが多いのにくらべて、クマが出現してこないし、サルの例もきわめて少ないのである。これらは当然ながら、地域の自然環境とその自然の変化とこの変化に関連した住民の生活の変遷を示し続けているものと考えられるのであるが（広瀬，1984）、聞き取りにおいて登場したサルの扱われ方についてここで考察してみたい。

黄門橋のサルと伝承残留の地域社会

これは、黄門橋の橋爪地帯での話である。橋のかたわらの畠や原野を地域の人たちは、「橋爪」と呼んでいた。こんな所に老猿が1匹で住みついていたという。ところが、このサルは作物を荒すとか、

人畜に危害を及ぼすようなことは全くしなかったが、いたずらをして人々を困らせたと伝えられている。あまり、そのいたずらが過ぎるので、「五郎兵衛」が荷縄でサルをしめつけてこらしめた。サルは手を合わせて、涙を流して拝むので二度と悪いことをするなと念を押してサルを放してやった。それからは、サルをいたずらが止んだという昔話である。これに類した話は、下吉野地区以外の場所でも残されているのであるが(広瀬, 1984), サルに対する強度の憎しみが見当たらない。サルは許されている点からもこの話には、生きものの殺生をさげ、共存を望む心の働きがみられ、動物観の形成を考えるうえで、サル退治伝承をこえたむしろ近代社会の生命尊重の動物観念の萌芽がみいだされる。この話が語り伝わる間に下吉野の人々の生活も変化していった。そして納得される話として伝承的に定着していったのである(広瀬, 1988)。

昔話を語る下吉野のインフォーマント(情報提供者は女子が多く、当然ながら語りのなかにも話者の心境が多いに働く。1988年3月24日の聞き取りでは、志村しげ(80才)、中林すみ(69才)、中野なつ(89才)、中川ひさ(81才)、太田はつ、辻つね(85才)、北出一男(69才)北出チヨ(72才)、山本八千代(72才)、山岸あい子(74才)、太田なか子(73才)、山田サキ(70才)、黒川みよし(64才)、辻武松(70才)、山本重孝(75才)の各氏15名との面談を行うことができたのである。

このように、地域社会内における高齢者の語りによって、今日に伝えられた、アニマル・ロアが記録できたことは幸いであるが、インフォーマントの暮らす社会は著しく変化しつつある。

下吉野地区でのアニマル・ロア聞き取りによって、新たな環境指標動物となりつつあるキツネ、蛇等を中心として、地区の環境変化を明らかにすることが可能となってきた。また、1989年2月の調査により、同地区に物質文化交流をもたらせた生業人、職業集団の実態が明らかになりつつある。昭和47年から昭和61年の間に吉野谷村における産業別事業所数や従業者数は吉野谷村勢資料1988によれば、133事業所数894人から、96事業、781名と減少しており、建設業事業所33から12事業所数への変化は著しい、農林水産、鉱業関係事業の変化がみられないなかであって、製造業事業所数は増加しているが、機械化合理化の成果として従業員数の方はかえって減少していることが事業所統計調査によって明らかとなっている。卸売業、小売業の商店数、従業員数、従業員数は急激に拡大・増加しているのが吉野谷村全体の経済・社会の動向である。

このような地区住民の生活環境の変化のなかであって高齢者によって収録され、記録化される情報は、地域の文化としての人々の価値認識の歴史を保存することに他ならない。したがって、ヒト・環境・生活と係わった下吉野地域の文化の変容が今後の聞き取りによって、明らかになるものと考えている。

生きものに係わったアニマル・ロアも地区生活における多くの人々との価値認識との関連で解きあかさねばならないのである。



図3 吉村しげさんの語る「古いものの消滅」談には、社会内の物質観念の変化が伺える。

吉村しげさん

下吉野でのサルの民間伝承の収録

1979年12月25日、下吉野地区調査において4名のインフォーマントからなる同地区住民間の身のま

わりの自然をめぐる動物観等につき知ることが多かったが(広瀬, 1981), サルに関する民俗伝承について聞き取りを行ったが, ニホンザルの生息環境と同地区住民の生活と係わる環境社会ではニホンザルとの接触は乏しかった。この点は同地区住民間の民間伝承の残留上の特色ともなるものと考えていたにもかかわらず, 今回の聞き取りであらたにニホンザルをめぐる伝承を収録することができた。

伝承者は, 山田サキさん(70才)である。“サルについては, 母から聞いた話であるが, 家の煙出し(2階窓)から入り込んだサルが, イロリにかかったナベのなかの粥を見つけて食べようとして, 手を出したが熱くて手が出せない。そこで, サルは腹たちまぎれに粥のなかに灰を入れて混ぜてしまい, 食べられんようにして“いんでしまった。”という話である。このような, 伝承にみる限りニホンザルの行動はよく観察されていて, 人々の関心と呼ぶのであるが, 果してサルが伝承者の思ったような仕草をしたものかは定かではない。しかし, 愛知県犬山市にある財団法人日本モンキーセンター野猿公苑のサルたちが, 冬期間タキ火に近づいて, 火の中のイモを取り出し地面にこすりつけて熱をさまして, 焼きイモを食することがみられている。サルの行動の伝承には, サルを見る者の心の働きがしばしば強く現れていることが多いと考えている。1988年3月24日・25日の調査時における各インフォーマントからの伝承紹介によると, 北出チヨさんは蛇, 辻武松さんのツチノコ, サル等の伝承の記憶内容も明きらかとなってきたのであるが, この場合のサルについての伝承は中宮温泉蛇谷園地での管理者発話のものであって, 比較的新しい話題であった。

以上の伝承については, 全ての昔話収録完了の時点で, 地域の地名, 地形, 環境と係わった自然史研究の観点から考察を進め, 新たに稿をおこし論ずる予定である。

地域の急速変化のなかの生活認識

1989年2月12日, 下吉野地区住民の認識調査においては戦前, 戦後の生活文化の急変に対していかに対応がなされ, 今日からみて, 環境の変化を含めてそれぞれの知識や物質観念をとらえていたかについて, 多くの発話記録をえた。8名のインフォーマントの生活体験は決して一律のものではないが, 環境の変化や生活物資, 日常生活用具等の利用をめぐる考え方には多くの共通点を有していた。筆者はすでに鳥越村地区各域にみられた自然に係わる意識や生活態度についてアンケート, 直接面談等を含めて聞き取りを試みてきているのであるが, 手取川をはさんで鳥越村と吉野谷村における住民層の環境観の実態把握は, 1988年以降の調査で一段と活発となってきた。自然観に係わる考察は別稿を予定しているので, 本論報告では急激な現代化の進んできた吉野谷村の下吉野地区の生活変化のなかであって, 高齢者達がいかに日常生活のなかで, 過去から現在にいたる地域の変化を生活の軸でとらえているかを聞き取り対談のなかで得た情報をもとに考察を進めておきたい。

同地区において, 高齢者婦人達が特に環境変化として第一位に挙げたのは道路の変化, 第二に子供達の安全度の高まり, 第三に生活物の減少であった。現在では村内において, 子供の養育に係わっていないインフォーマント達ではあるが, 女性インフォーマントのすべてが, 子育てに対する関心の高い点には注目しなければならないのではなからうか。インフォーマントたちによれば, 村境域内の道路が拡大さ



図4 吉野谷村・下吉野生活改善センター
(亀寿会のメンバー活躍の場である)

れ、危険度が高まる交通状態になったとはいえ、用水の整備と防災が行きとどき、子供が水路に落ちて死ぬような事故は皆無となった点を指摘している。かつては、流水に溺れ死亡した子供があったという。「村内に危ないところなくなった」という発言にふくまれる、環境の文化化の内容についてはさらに詳細な変化について調査を試みたいと考えている。当然ながら衛生思想の普及もあって、子供達の健康も守られ疾病による幼児死亡は減少しており、子供の成長に対する不安感を持っていないというのが一致した社会変化と係わる認識点であった。インフォーマント達は子供達の生活がより安全になったこととは別に、子供達への気掛かりを示している。“昔のように気を使わなくなった(北出チヨ)”は、このように言っているが、子供たちの物への関心の変化を心配している。志村しげインフォーマントは味の変化に関しては、明らかに今日の食品の味は「甘く」なり、子供たちは味噌漬けのようにならないものを食しなくなったとその食性変化の一端についてふれている。

また、高齢者と共棲の家庭においては、世代に伝わる味覚のあることを認めるが、独立夫婦の家庭等においては、味覚の伝承は絶えていく傾向にある点を指摘している。

インフォーマントたちは、子供たちは「煮物」を食べなくなった。その代わりに「油いため」の物を好んで食べるようになったと伝えている。「今の味」とは、油いためのような食物を指していたのであり、インフォーマントの家族内においてみられている現象である。このような結果から、将来子供たちの味覚の世界は変わってしまうものと判断している。

次に、失われていった道具類に関しては、従来使用されていた鉄ナベが挙げられているが、問題となるのは使い勝手のよかった道具類や容器など、特に女子においては長年の使用にたえていたものの棄損に関しては、深い関心が寄せられていた。民俗資料として今日収集され、収蔵されているものについて、その一つ一つが如何なる意識のうえに立って使い込まれていたものであったかは、その詳細な記録が今日充分残されているとは限らない。むしろ、そのような記録は残されていない。今日の調査によっていかに下吉野地区の婦人たちが「くけ台」や「針箱」に強い愛着を抱き、それらの消滅の過程に様々な思いを持ち続けているのかを判明してくると、「物」をとりまく人々の意識の記録の保存の重視性を改めて痛感する。

便利であり、そして使い勝手のよいものとされていた道具類の日常生活からの消失には、その背景となる技術変化、消費経済の仕組みの変容、生活文化受容の維持等多くの要因が考えられるか、インフォーマントたちの住む家屋の建て直し、改造等の住環境の変化時において、それらの古き用具類はその多くが棄て去られている。“しらない間になうなってしまったくなくなってしまう”(志村しげ) “鏡台などは残るけれど、日々使う傷みのひどかった針箱などはすぐなくなってしまう”(山本あいこ)”と述べられるなかでいかに「道具類が知らん間にあつという間になくなっていったというようにインフォーマントが物の急激な消滅を印象づけられているかがわかったことによって、世代間による物質価値観認識の格差が大きく存在していたかがうかがえるのである。

このような「捨てる」生活態度にインフォーマントが迫られたのは1970年代末頃からであるというのが一致したとらえ方であった点は意味深いといわざるをえない。道の変化について、あつという間に物が捨てられるという消費文化の台頭を必ずしも心よく思っていないことはよくわかったのであるが、特



図5 亀寿会・地域の伝承を語る会
下吉野村・下吉野生活改善センターにて
右端 中野なつさん (89才)

に「つくろいもの」などのような衣服等の修繕、繕いは今日の生活のなかでみられず、“継ぎのあつたものはみっともなくて身につけられない”という意識もこの10年間の間に強く意識されるに至ったと考えられている。これらの事象の発生の原因としては「物のありすぎ」、「経済が豊かになった」という二つの理由があげられているが、個々の感情の底に潜む物質観について知ることができたことは幸いであった。下吉野地区の高齢者の生活体験のなかで古いもの新しいものをめぐっては、個人個人の価値観の違いはあるにせよ、急激な社会変化としてもっとも「物」の世界に変化をいたさせたのは「住居の改造、新築」であるという共通の認識は強く存在していたのである。

本論においては、自然への対応や自然物とりあつかいの変化等についてはふれないが、下吉野の人々に大きな生活改革となった水田開発、発電所開設、交通の飛躍発展、山村開発、生活振興等のより具体的な生活変容のうちに歴史的な自然環境や自然物に対する伝統的な感じ方が、いかに組み込まれて文化の変容としてあらわれてきているかが追求されている点であることを述べておこう。

今となって、打ちすてられた物のなかに「臼」と「杵」が含まれていたことは、食物文化の変化のもつ変容度は、伝統食文化との間に深い相関があったことを物語っており、この臼と杵の衰失がいかに高齢者層のインフォーマントたちに強くやまれいたかがわかったときは驚きであった。

プラスチック製品の進出や新たな食物や包装、運搬これらの生活文化に対する高齢者の反応は、過去に存在していた価値観と単にぶつかり合うものではない。これらの受容と反発の態度の中から、地域社会における文化変容の特長を明らかにしていくことが可能となっているのである。

かつて「塩物」と称された鮮魚やカマボコを村へ持ち込んでいた金沢からの行商人、その名を「元さん」と親しまれていたが、搬入した「魚」は、今日この地区のインフォーマントの多くに、多くの記憶をよびおこしてくれた。

ようやく、インフォーマント自らの手で語られ、記録され、その生活文化の実態が明きらかとされようとしている。地域社会の文化は地域の宝物であり、このような形で今日、下吉野の亀寿会の人々が、文化活動を開始したことは、まことに同慶にたえない。

お わ り に

本論は、下吉野地域の高齢者間において組織されている亀寿会会員の発話を通じての聞き取りの一部をとりあげたものである。地域の人々による自主的研究・学習活動によって、地域の生活文化を解明せんとする試みであるだけに、今後の研究発展を一層豊かなものにする方向をもっている。御仏供杉は永年にわたって吉野谷村を見守ってきた。永年にわたって、地域の文化研究活動にこそ、本来の民俗研究が発展すると主張し続けてきている筆者にとって、地元山本重孝氏の御努力に敬意をとくに表したい気持ちで一杯である。インフォーマントの一人一人が、熱意をこめて語り伝える生活そのものは、地域社会にとっての価値ある文化であると考えている。今回はこれまで、絶望視していたニホンザルに関する昔話を聞くことができたことも驚きの一つであったが、同地区の急速な環境変化、新たな文化化によってもたらされるであろう。

本調査には白山自然保護調査研究会の調査費を使用した。付記して謝辞をあわせて呈します。

文 献

広瀬鎮 (1981) 中宮 (石川県, 吉野谷村) におけるニホンザル伝承にみられる自然観の変遷. 白山自然保護センター研究報告, 第7集, p.41-54.

広瀬鎮 (1984) ニホンザル伝承と白山麓吉野谷村下吉野にみられた地域住民間の自然動物観. 白山自然保護センター研究報告, 第11集, p.89-77.

広瀬鎮 (1988) 石川県石川郡手取川流域村落にみられた住民の自然認識 (1). 白山自然保護センター研究報告, 第15集, p. 117-128.

広瀬鎮・水野礼子 (1975) ニホンザルと出会いにおける動物観の比較民俗学的考察. 石川県白山自然保護センター研究報告, 第2集, p.85-101.

Summary

Author could hear and record many of aged residents in Yoshinodani Mura, knowing their real and historical value cognition for daily life and their own culture.

Kijyukai of Shimoyoshino is now going on to find many folk-lore, and traditional land-name origin with their own efforts. Author's interests in animal lore, appeared in Shimoyoshino, are now accumulating including monkey-lore.

Modernization, and developments regional lives are remarkable, then the trials of Kijyukai's members will reduce a great value in future. The author tried to make analyzation of traditional animal-lore and monkey-lore of Shimoyoshino through 15 informants' messages, confirming their own life history. Author disclosed characteristics of animal-lore which constructed typical cognitive value through close-culture and image communication of wild life of animals in nature.

Research of life history of Shimoyosino has become the most important works of Hakusan area since 1979.

Author will continue to examine dwellers thoughts in nature and cognition for value in life history among every generations in each family.